

平成17年度大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会  
ニホンジカ保護管理部会  
議事概要

◆日 時 平成18年3月9日（木） 13：10～15：10

◆場 所 春日野荘 故傍の間

◆出席者

<委員等>

大井 徹	独立行政法人森林総合研究所関西支所生物多様性研究グループ長（ご欠席）
小船 武司	日本野鳥の会奈良支部 支部長（ご欠席）
田村 義彦	大台ヶ原・大峰の自然を守る会 会長
柴田 敏式	名古屋大学大学院 教授
鳥居 春己	奈良教育大学教育学部附属自然環境教育センター 助教授
村上 輿正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学 講師
高橋 裕史	独立行政法人森林総合研究所関西支所生物多様性研究グループ

<関係機関>

林野庁近畿中国森林管理局三重森林管理署	平井 成典 流域管理調整官
奈良県農林部森林保全課	若山 学 主査
三重県環境森林部自然環境室	橋爪 奨 技師
上北山村地域振興課	小坂 哲 主幹
吉野きたやま森林組合上北山支所	下吉 博之 技師
上北山村獣友会	(ご欠席)
三重県獣友会	宮崎 次男

(以上敬称略)

<事務局>

近畿地方環境事務所	小沢 晴司 統括自然保護企画官
	徳田 裕之 野生生物課長
	石川 拓哉 国立公園・保全整備課
	福原 裕 //
吉野自然保護官事務所	熊代 哲 自然保護官
(財) 自然環境研究センター	黒崎 敏文 上席研究員

## ◆議 事

- (1) 平成17年度調査・事業のとりまとめについて
- (2) 次年度の調査・事業内容について

## ◆議事概要

- 本部会の部会長に村上委員を選出。
- 資料に基づき「平成17年度調査・事業のとりまとめ」及び「次年度の調査・事業内容（案）」について事務局より説明。
- 委員及び関係機関からの主な意見等

### (生息状況モニタリング調査について)

- ・糞粒法については、大台ヶ原における生息密度推定の問題点に関する報告をしているので参考にしてほしい（保全生態学研究10：185-193（2005））。
- ・生息密度は、防鹿柵により囲われた範囲を除いて算出するべき。
- ・[事務局] 現在のところ、上記範囲を除いた場合との差は約1頭/km<sup>2</sup>。
- ・生息密度の推定方法については、今後WG等を開催して検討するべき。
- ・GPS テレメトリー調査結果は、季節的な地域変化が見られる生息密度を推定するうえでも重要な資料となる。
- ・過去にもラジオテレメトリーによる行動域調査を実施しているので、それらの結果と比較する必要がある。

### (個体数調整について)

- ・捕獲効率は、人件費などコスト評価の観点も取り入れて算出する必要がある。
- ・個体数調整の時期は、出産する前が効果的である。
- ・RKFI 指数による栄養状態の把握は、指数の値及び季節変化に地域差が非常に大きいため、現時点では評価の方法はないが、継続的に実施しデータを蓄積して、環境の改善及び個体群の質的变化を評価するべきものである。
- ・大台ヶ原のデータでは非妊娠個体に比べ、妊娠個体の栄養状態が悪かったが、奈良公園のシカは、妊娠個体の栄養状態が良い。
- ・大台ヶ原の特徴は、シカがササを主食としていることである。また、ササの栄養が少ない秋よりも、栄養の多い夏に樹皮を食べる個体が多くなることである。樹皮を吃るのは、栄養補給のためではないようである（Mammal Study, 29:73-83. (2004)）。
- ・シカの個体数については、シミュレーションの精度に問題があるため、推定生息頭数よりも実数値の議論が必要である。
- ・推定生息頭数に関するシミュレーションの精度を向上させるためには、さらなる捕獲個体に関するデータの蓄積が必要である。
- ・大規模捕獲柵は、柵設置作業が忌避効果をもたらすことが予想されるため、誘因餌等により、設置後直に群れを柵の内側に誘引できるかが重要となる。

- ・ 銃器（麻酔銃を除く）による捕獲の検討とあるが、実際に地元で実施できる者がいるか。技術的にも難しいのではないか。
- ・ 上北山村では猟犬による銃獵を実施しており、捕獲目標は達成できると考えている。ただし、国立公園特別地域内の犬の利用に問題がある。
- ・ 銃器（麻酔銃を除く）による捕獲については、安全性に配慮した実施方法等について次年度から検討・整理し、大型捕獲柵による捕獲結果を見つつ、順次合意形成を図るための準備を進めていくべき。

(シカによる植生への影響調査について)

- ・ 下層植生調査における食痕の確認については、将来的な結果が過大評価になってしまうことを防ぐため、その年のものと過年度のものを区別して調査する必要がある。
- ・ 実生の採食は、シカだけではなくネズミやウサギでも確認されており、それらへの対策も必要である。
- ・ ササの高さは、芽生えの頃に触れられると低くなる傾向があるため、調査の際には注意が必要である。
- ・ 剥皮状況調査では、剥皮状況と枯死の関係について「剥皮度が大きくなるほど枯死率が高くなる」という整理がなされた。今後もモニタリングのため、3年に一度の間隔で調査を継続する必要がある。

(区域保護対策・単木保護対策について)

- ・ 西大台については、パッチディフェンスによる保護対策を主として検討しているが、シカによる影響を見つつ、必要があれば面的な防鹿柵を設置する必要がある。

[文責：近畿地方環境事務所]